
小さな聖王と騎士物語

湯汰楼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな聖王と騎士物語

【Nコード】

N0082R

【作者名】

湯汰楼

【あらすじ】

その身は鎧、その身は盾、その身は剣…。人造魔導サイボーグ「デューゴ」と、いにしえの時代に生きた聖王の遺伝子を持つ少女「高町 ヴィヴィオ」は、まるで運命のように邂逅する。聖王の力と二つのロストロギアを巡り、様々な人間達が暗躍する中、デューゴはヴィヴィオを護る騎士として戦乱の中に立つ！

いま、少女と青年の物語が始まる……。

序章「青年が"世界"へ帰る日（前書き）」

何故か思い付いてしまった話を、稚拙ではありますが文章におこしました。遅筆な上、拙い作品ではありますが、お読みいただければ幸いです。

序章 青年が“世界”へ帰る日

「さあ、これでいい…。あとはコイツが自動的にお前をミッドチルダへ送ってくれる。」

いたる所に様々な機械が設置された薄暗い部屋の中、白衣を纏った男性が全ての作業を終えて”彼”へと語りかけた。

部屋の中央に置かれたベッドに横たわっている”彼”は、男性の言葉に首を捻り疑問を口にする。

「博士、今回の任務の説明を求めます。それに、クラリオンチャームまで携帯するというのは何故ですか？ 持ち出しは厳禁のハズですが……。」

「いや、すまない…こうするしかないんだ。もう、お前さんをこれ以上巻き込む訳にはいかんのだよ。」

「博士、何をおっしゃって……。」

- ドガアアアン!!! -

突然の爆発音に、彼は男性への言葉を遮られた。その爆発がまるで耳に入っていないかのように、男性は淀みないタッチで目の前のコンソールを操作する。すると、天井からベッドごと彼を囲むように大きな機械が降下してきた。

「博士、これはっ!?!」

「すまなかつたな、”デューゴ”。私達のような者の妄執に、お前を巻き込んでしまった。本当に、すまない…。」

部屋の外からは更に爆発音が轟き、内部の人間に緊急退避を告げる耳障りなアラートが鳴り響いている。最初の爆発をキツカケに、そこかしこで連続して爆発が起きているようだった。この施設があるのは地下、この規模の爆発では施設の包む地盤などすぐに決壊してしまう。

だが、激しい揺れが施設全体を襲っているにもかかわらず、男性はまるで神に懺悔するかのように、両手を胸の前に組み膝をついた。

「私は、お前の本当の名前すら知らない。ただ幻想と科学に取り憑かれ、お前という”人間”を壊した。それどころか、お前に背負わなくてもよい”責務”まで与えて……。」

「博士、早く脱出を！ 博士っ！！」

「本当に、すまなかった…。許してなどくれなくていい、私の事など覚えていてくれんでも構わない。ただ、せめてお前だけは生き延びてくれ…。」

彼の眼前で涙を流しながら、全ての罪を告白する神の信徒のように、男性は天を仰ぎ両手を広げた。既に爆発の影響で部屋の機材が瓦礫に潰され、あちこちで小規模な爆発が起きている。

男性を救助しようとベッドを囲む機材を破壊しようと試みるも、自分の周囲に展開されたAMFにより魔力の精製は不可能。さらに、男性の施した簡易プロテクトのせいで”鎧”も装着できない。

ならばと、腕力での破壊を試みようとしたその瞬間、男性がコンソールのエンターキーを叩いた。AMFが停止したと同時に、彼の周囲に長距離転移用の魔法陣が展開される。

「なっ…!？」

「私の出来る最後の偽善だ。せめて小さな自由を、お前に……。」

彼が転移する瞬間に見たのは、ひざまづく男性に降り注いだ大量の瓦礫の雨だった……。

- - - - -
- - - - -

「どう、誰が見つかった？」

「駄目ですね…、こんな状態じゃ生存者はおるか、遺体だって簡単

には掘り出せませんよ。」

白と青を基調とした制服に身を包んだ局員は、背後に広がる瓦礫と土砂を見ながら溜め息をついた。

辺境の管理外世界での調査任務中に発生した、原因不明の大爆発。その現場に訪れた管理局執務官フェイト・T・ハラOWNと、その補佐官であるティアナ・ランスターは、まるで隕石でも落ちたかのように陥没したその場所を見つめる。

「あそこに何かの施設があった事は間違いなさそうんだけど、この状態じゃあね…。」

「これじゃ調べようがないですもんね。どうするんですか、フェイトさん？」

「ん…まずはクロノに報告して、今後の調査スケジュールはそのあとに検討だね。」

「了解です。じゃあ私、ハラOWN提督に連絡入れてきます。」

そう言つと、ティアナは仮設された通信施設へと小走りで向かう。
それを確認してから、フェイトはもう一度現場へと目を向けた。

「一体、なにがあつたつていつの……？」

彼女の疑問に答えられる者は、その世界には誰も存在しなかった。

邂逅それは、初めて"騎士"と"姫

連投です。といっても、ここからは出来上がり次第の投稿になって
しまいますが…。

それでは、よろしければお楽しみください。

邂逅それは、初めて"騎士"と"姫"

夕暮れが街全体を包み、人々の足元からは長い長い影が道の先へと伸びている。街を歩く人の間を縫って、少し大きめの通学用鞆を背負った少女が歩いていった。

少女 - 高町ヴィヴィオは、胸の内の嬉しさを隠すことなく、上機嫌で家路を急ぐ。今日は大好きな母親が一週間ぶりに家に帰ってくるのだ。最近は仕事が忙しかった為、母親は自宅に帰れていなかった。しかし、明日は夕方ぶりに休暇が取れた為、今日は早めに仕事を切り上げて帰ってくると、昨晚連絡があったのだ。

話したい事がたくさんあった。学校の勉強の事や友達の話、今日は体育で二重飛びにチャレンジした事など。母親となにを話そうかウキウキするヴィヴィオの足は、自然と早足になっていた。

「ふふ… あつ、そうだ！」

彼女は何かを思い付くと、歩いていた歩道を曲がり、小さな公園の中へと入っていく。その先に見えるのは小さな林。クラスの男の子達が以前話していた、住宅街への近道だという場所だ。

ヴィヴィオの家があるのは住宅街の中心、近道の話が本当ならもつと早く帰れるはずだ。一刻も早く家に帰り着きたいヴィヴィオは、迷う事なく林の中へと足を踏み入れる。

林には獣道のような通路ができていた。恐らく、そこを近道にしていた人達が踏み慣らしたのだろう。ここなら人にぶつかる心配も無いからか、ヴィヴィオはその通路の入口で短距離走のスタートのような体制に入る。

「よーい…どーんっ！」

自分で合図を出し、獣道をひたすら道なりに駆け抜ける。足元の草をザクザクと音を立てながら踏み締め、体育の授業で教わった通りに勢いよく腕をふりながら走る。目指すゴールは道の最後、林を抜ければ見慣れた住宅街に着くはずだ。

「ぐっ…うう……。」

「ふえっ？」

人の声、だろうか。不意にヴィヴィオの耳に届いた微かな音が彼女の足を止めた。聞こえたのは自分の右側、道を外れた薄暗い林の奥の方。

足を止めた事によりそれまで猛っていた気持ちが沈静化し、ヴィヴィオは周囲をグルリと見渡した。いくらまだ日は沈みきっていないとはいえ、普段は入り込まない林の中は、夕闇を纏っているせいで不気味で寂しげな雰囲気醸し出している。そういえば、クラスの友達がこの林にはお化けが出るとも噂をしていたような気がする。

この獣道を夕暮れ時に通ると、血のように真っ赤な目をした一つ目のお化けに捕まり、そのお化けが住むという冥界に連れ去られてしまふ…という話だ。クラスの子も何人かそのお化けを目撃したとも話していた。

”冥界”というのはよく分からなかったが、お化けに連れ去られてしまふというのは、小学校低学年の怖がりな女子には充分すぎる怪談話だ。ご多分に洩れず、ヴィヴィオもその話を聞いた時に少し涙目になってしまった。

早く帰りたいという気持ちが先行しすぎて忘れてしまっていたが、本来ならこんな時間帯に近付くような場所じゃなかった。途端にヴィヴィオの足は震え、よせばいいのにキョロキョロと挙動不審に周りを見周してしまう。

そういえば、そこかしこの草むらがガサガサと動いている。そういえば、ギャーギャーと鳥の騒ぐ声が聞こえる。そういえば…微かに向こうの方に赤い光が明滅しているような気が……。

「ひっ………!？」

先程声らしき音が聞こえた林の奥に、真っ赤な光が一点明滅しているのをヴィヴィオの目が捉えた。いや、捉えてしまった。恐怖に声が上がリ、後方に後ずさりしてしまう。先程思い出してしまった話、が頭をよぎり、一つ目の怪物の瞬きのように感じてしまう。

ヴィヴィオの身体の震えがさらに大きくなるが、そんな彼女の耳にあの声がまた届いた。

「ぐうっ!……せ……、か……せ………。」

「…だ、だれかいますか？」

恐怖を無理矢理押さえ込み、出せるだけの声を搾り出して奥の暗闇へと声をかけるヴィヴィオ。その声が届いたのか、明滅を続けていた赤い光が、今度は緑色へと変化する。

噂のお化けとはなにかが違う…。そう思い、ヴィヴィオは意を決して暗闇の中へと足を踏み入れた。踏み慣らされた道とは違い、乱雑に伸びた草や周囲の木から落ちた枝が、一歩進む度にパキパキと音を鳴らす。その音がヴィヴィオの恐怖をまた煽るが、二度聞こえた苦しい声が、ヴィヴィオの頭から離れず足を進ませる。

緑色の明滅に向かい少し歩くと、少し開けた場所に出た。大きな切株が中心にあり、そこから周囲数メートルに渡り草むらが広がっている。そこでヴィヴィオの目に飛び込んだのは、その光景にはそぐわないボロボロに傷付いた青年の姿だった。

「えっ、ええっ!？」

身長は2メートル近くはあるだろうか。白髪に近い灰色の髪に、ボロボロの水色の入院服のようなものを着ている。切り株に横たわるように寝そべっている彼の身体中には、大小様々な傷がついてしまっている。だが、ヴィヴィオが声を上げたのはそこではない。

彼の身体からは一滴たりとも血液が流れ出ていない。代わりに彼の傷から流れ出るのは、鈍色のオイルのような液体。さらに、傷口からは銀や黒の管や配線のような物が覗いていたのだ。

- - - - -
- -

「やっぱり、あそこも？」

「ああ、調査員からの報告から導き出された結論だ。まず間違いないだろうな。」

時空管理局本局にあるクロノ・ハラオウンの執務室。部屋の主であるクロノは、フェイトとティアナの二人と通信しながら、手元の報告書を深刻な顔で見つめながらそう言った。

「残念ながらあの施設の調査にはしばらく時間がかかってしまうんだが、こちらがマークしていた違法研究者のうちの数名が、あの世界に秘密裏に出入りしていた事が確認されている。物証はこれから

だが、限りなく黒に近いな……。」

「じゃあ、あそこでも例の”ロストログア”絡みなんですか？」

「断定はできないが、な。そして、これまでの事例を考えると……。」

「人造魔導士……。」

モニターの向こうのフェイトが唇を噛み悲痛な表情を浮かべる。隣にいるであろうティアナは、心配そうな表情をフェイトへと向けている。

”人造魔導士”、これはフェイトにとってタブーともいえる単語だ。そこにどのような理由があろうと、彼女にとっては命を弄ぶ最低の行為なのだ。沈痛な面持ちのフェイトの気持ちを痛いほどに理解しながら、クロノは上官としての表情で二人に任務を伝える。

「フェイト・T・ハラOWN執務官、ティアナ・ランスター執務官補佐、両名に新たな任務を伝える。違法研究者達の調査は続行、追加の対象者リストをすぐにそちらへ送る。くれぐれも慎重に捜査してくれ。」

「了解です！」

「…了解。」

返答を聞き通信を切ったクロノは、再び資料へと目を落とし溜め息をついた。そこに写る数名の違法研究者の写真やデータを流し見て、デスクの上へと放り出した。

後方の窓から、遠方に広がる夕暮れのクラナガンへと視線を移し、クロノはポツリと呟いた。

「”器”、か……。」

- - - - -
- -

ヴィヴィオの眼前で倒れている傷だらけの青年。傷口からのぞく機械的な部位は、まるで漫画やアニメに出てくるサイボーグのようだ

った。子供の目から見ても、明らかに人間とは違つとわかつてしま
う。

と、彼の右手の傍に落ちているものにヴィヴィオは気付いた。純白
の翼を象つたようなレリーフに、赤と緑の二つの宝石が嵌め込まれ
たペンダント。精巧な細工は気品を醸し出し、まるで天使の翼をそ
のまま首飾りにしたかのように美しい。ヴィヴィオはそれを手に取
ると、その美しさに目を奪われてしまった。

「わぁ…キレイー！」

『人工鎧装、及び各種ギミック運用に必要な魔力量…クリア。対象
のリンカーコアによる精製魔力量…クリア。No.753”デュー
ゴ”との意識シンクロ率…測定不可、ユニゾンによるシンクロ率の
測定が必要。』

「ふえっ！？ な、なに…？」

ヴィヴィオがそのペンダントをしげしげと手に取り見つめていた時、
突如そのペンダントの緑の宝石が明滅し、それに合わせ機械的な音
声が響いた。

狼狽するヴィヴィオの様子をまるで無視し、ペンダントから響く音がヴィヴィオに質問をする。

『Please, your name. Master? (貴女の名前を教えてください、マスター。)』

「ね、ねーむ…？ わたしは…た、高町ヴィヴィオです。あの…あなたのお名前は？」

『高町ヴィヴィオ…No. 753 デューゴのマスターとして登録を確認。音声承認によるユニゾンの実施により、シンクロ率のデータ収集が急務。デューゴ、起動。緊急起動信号、発信。』

「ぐっ…任務、確につ…ん。マスター…ヴィヴィ、オ…。」

「あっ…！ 駄目っ、怪我してるのに起きちゃ駄目だよっ！」

ペンダントとの奇妙なやり取りがあったすぐ後、突然倒れていた青

年が立ち上がり、ヴィヴィオがそちらに視線を向ける。だが、苦しげな表情と声を上げながら無理矢理に身体を立たせようとする青年に、ヴィヴィオは先程までの驚きを忘れ、その行動を制止しながら心配そうに傍に駆け寄った。そのまま彼を元の場所にゆっくりと座らせ、ポケットからハンカチを取り出して頬から流れていたオイルを拭った。

彼はヴィヴィオに素直に従いながら、ジッと彼女の瞳を見つめている。まるで、飼い主の命令を待つ犬のように微動だにしないその姿に、ヴィヴィオは多少臆しながらもおずおずと尋ねる。

「えっと…わたし、高町ヴィヴィオです。」

「それは知っています…マスター、ヴィヴィオ…。」

「ふえっ、なんで…あ、あの…あなたの名前は、なんですか？」

「私は…デバイスヒューマン…No.753、”デューゴ”、と…います。初め…まして…マスター、ヴィヴィオ…。」

騎士は出会う、忠義を尽くすべき姫と。鎧は出会う、自らが守るべき担い手と。宵闇が深くなる中、二人は運命によって邂逅を果たしたのだった。

邂逅それは、初めて"騎士"と"姫

感想など、もしいただけたら嬉しいです。

襲撃、彼はその身を"鎧"に包む、

時空管理局本部の廊下を、三人の女性が足早に歩いていく。いや、正確に言えば足早なのは一人で、二人はそれを追いかけるようにして足早に”なってしまうている”だけだが。

「な、なのはちゃん…そない急がなくてもクロノくんは逃げへんって！　せやからもうちょいゆっくり歩いて……。」

「今日はヴィヴィオと食事の約束してるの！　だから、早く仕事切り上げて帰らないと！」

「分かった、分かったから少し落ち着け高町！　私と主はやては任務が終わった直後なんだ、頼むから少し速度を……。」

「絶対にNOなのっ！　ほら、二人共早く早くっ。」

女性・高町　なのはに急かされ、八神　はやてとシグナムの二人は溜め息を尽きながら歩みを早めた。それを確認すると、なのはは前

に向きなおってズンズンと歩みを進めた。

自分も今日までハードな教導スケジュールをこなしてきた。その合間を縫ってやっと手に入れた愛する娘との時間、しかしまるでそれを邪魔するかのように急な呼び出しがクロノから入ったのだ。少々（？）の苛立ちなど当たり前である。

クロノには悪いが事情を話してさっさと終わらせてもらおう。局員としてはあまり褒められたものではない事を考えながら、なのははクロノの執務室のドアをノック、開くと同時に猛然と彼のデスクの前へと進み出た。

「クロノ君、一体なに？ 今日はいくから家に……！」

「申し訳ないが緊急事態だ。すぐにクラナガン市街へ向かってもらいたい。悠長に話している時間が無くなってしまった。」

「はあはあ……な、何があったんや、クロノくん？ それに、緊急事態って？」

「済まないが時間が惜しい。移動しながら説明する！」

そう言うが早いか、彼はデスクの椅子にかけてあった自分の上着をひつつかみ、足早に執務室を出る。その鬼気迫る表情に呆氣に取られながらも、三人も慌ててその後を追う。

向かう先はヘリポートのようだ。武装隊と思われる局員と通信で連絡をとりながら、細かく指示を出すクロノ。ヘリポートへの直通エレベーターに乗ったタイミングで、一体何が起こったのかとシグナムが切り出した。

「それで、緊急事態とは一体なんなのですか？」

「…元々君達を呼び出した理由は、フェイトとティアナが追っている事件の手伝いをして欲しいと頼む為だったんだが、先程巡回中の局員から複数の緊急連絡が入ったんだ。」

「緊急連絡？」

「クラナガン市街地に、多数のガジェットの転移が確認された。すでに市街の建物や市民に被害が出てしまっている。」

「なっ…！？」

三人は驚愕に目を見開いた。そもそもクラナガンには、管理局が設置した市街防御用の多重結界が張られており、市街地に直接転移など不可能だ。四年前の「J・S事件」以降、航空監視も相当強化されている。結界を破ろうとするような輩がいれば、たちどころに捕縛されてしまう筈だ。その防衛網などまるで無視するかのように、クラナガンの中へ突然転移してきたのだ。

クロノの話によれば、ガジェットが現れたのは複数の箇所と同時に、数は有に100機を越えているらしい。当然のようにAMFを展開され、巡回に当たっていた局員では対処しきれていないようだ。

「そらまたぎょうさん現れたもんやな…。ほんで、私らの任務は？」

「はやては僕と現地での武装局員の指揮。なのはとシグナムにはガジェットの制圧と市街の防衛を担当してもらう。ガジェットが現れたポイントは、いまそれぞれのデバイスに転送した。」

レイジングハートとレヴァンティンがデータの受け取りを確認して明滅する。と、レイジングハートが何かに気付いたように音声を発

した。

『マスター、ガジェットの予想進路の中に、マスターの自宅付近が含まれています。』

「えっ……そんな、いまはヴィヴィオー人しかないのに!？」

「…クロノ提督、私と高町は先行して市街地に直接向かいます。構いませんね?」

「ああ、分かった。僕達はあとから向かう。君達二人はまず住宅地付近に直接向かってくれ。」

「了解!」

(無事でいて……ヴィヴィオー!)

- - - - -

-

「だ、大丈夫…デューゴさん？」

所変わって林の中。ヴィヴィオとデューゴは例の獣道を二人並んで進んでいた。まずはデューゴの手当てをしなければと、ヴィヴィオが自宅に連れていく事にしたのだ。

とはいえ、ヴィヴィオには医療の心得も機械技術も無い。しかし、傷だらけの彼を放っておくことなどできなかった。幸い、何故か彼は自分の言う事に素直に従ってくれたので、自宅に案内している。ただ、どう見ても重傷にも関わらず、迷惑をかけるわけにはいかないと彼女の手を借りる事なく歩いてしまっている為、ヴィヴィオ本人としては心配でならないのか大丈夫かと何度も聞いてしまう。

「問題ありません、マスターヴィヴィオ…。歩行に支障無し、各駆動系も正常に動作しています。」

何度聞いてもこの調子である。傷口からはオイルが流れ出し、時折バチバチと何かが弾けているような音も聞こえる。それでも、ヴィヴィオの指示する通りにズンズンと進めている所を見ると、本当に

問題など無いようにも見える。

チラリと彼の傷を見る。やはり、普通の人間には無い機械的な部品などが身体の内部に見てとれた。クラスの子が先生に隠れて学校で読んでいた漫画に、確か全身を機械なんかで改造された主人公の話があつたような気がする。傍を通つた時にチラリと見えたペーシには、確か……。

（さいぼーぐ、だっけ……。なんか、それみたいだなあ。）

などと考えながら、彼女の視線は傷口から頭上の彼の顔に移る。どこをどう見ても人間そのものという顔がそこにあつた。少し癖のある灰色の髪も、大きな黒い目も、耳だつて鼻だつて口だつて、人間のそれと変わらない。そんな彼が、あの漫画に出てきたのと同じ”さいぼーぐ”などとは、全く思えない。

ヴィヴィオが一人うんうんと唸っていると、突然デューゴがピタリと歩みを止めた。それから、しきりにキョロキョロと周りを見ていたかと思うと、急にしゃがみ込んでヴィヴィオにだけ聞こえるように声を抑え話し始めた。

「マスターヴィヴィオ、周囲にAMFの展開を確認しました。ガジェットの出現の可能性があります。指示を求めます。」

「ふ、ふえっ!？」

デューゴの突然の行動にも驚いたが、「ガジェット」という単語にヴィヴィオの身体が恐怖でビクリと反応する。四年前の事件を経ているヴィヴィオにとって、それは彼女の辛い記憶を呼び覚ましてしまう名前なのだ。

その反応を見たデューゴは、固く握りしめられたヴィヴィオの右手に触れると、真っ直ぐヴィヴィオを見つめながら告げる。

「安心してください、マスターヴィヴィオ。貴女の身は、自分が命を懸けて護ります。誰であろうと、マスターである貴女を傷付けさせません。」

そう言うと、ヴィヴィオがポケットの中に入れていた例のペンダントを取り出し、彼女の首にかける。恐怖のために涙目になっていた

ヴィヴィオは、かけられたペンダントに触れながらキョトンとして首を傾げる。

「これは、クラリオンチャームというストレージデバイスです。マスターヴィヴィオ、これを肌身離さず身につけていてください。これがあれば、自分は貴女を護る”鎧”となる事ができます。今から……！！」

と、デューゴが突然言葉を切ってヴィヴィオを抱き抱えた。驚きに声をあげそうになった瞬間、突然の衝撃がデューゴの身体を伝ってヴィヴィオを襲う。その直後、球体状のメカが背後から触手をうねらせながら現れた。そう、ガジェットである。

デューゴが、ガジェットの攻撃から庇ってくれたのだと理解した瞬間、ガジェットはさらに触手からレーザーを数発放つ。デューゴはさらにヴィヴィオを抱きしめる力を強め、その身でその攻撃を受け止める。

「デューゴさんっ！！」

「自分は大丈夫です…。それよりマスターヴィヴィオ、”ユニゾン”の許可を申請いたします。」

「ゆ…ゆにぞん？」

「はい…。このまま非武装状態でいては、いずれ攻撃を防ぎきれなくなってしまうです。ですから……。」

そのやり取りの間に、後方には複数のガジェットが集結しつつあった。このまま一斉に攻撃を受けてしまえば、デューゴだけではなくヴィヴィオまでもあのレーザーの雨にさらされてしまう事は明白だ。ヴィヴィオが胸元に輝くクラリオンチャームを握る。そのまま一度深呼吸をし、もう一度息を思い切り吸い込んだ。ガジェット達が触手を構え、デューゴの背中へと狙いを定める。その攻撃が放たれようとした瞬間、ヴィヴィオの叫ぶような声がある場に響いた。

「ユニゾンっ!!」

「了解、マスターヴィヴィオ!」

『ユニゾンの要請を確認。デューゴ、マスターヴィヴィオ、ユニゾン・イン。』

クラリオンチャームから電子音声が響き、まばゆい輝きが二人の身体を包み込む。突然の事態にガジェット達が一斉砲撃を開始、爆発により巻き上げられた粉塵が輝きごと二人を飲み込んだ。

砲撃が止み、ガジェット達が警戒体勢に移行した瞬間、一番先頭にいたガジェットに向け、土煙の中から一迅の光弾が放たれた。その光弾はガジェットを貫き、そのまま爆散させる。他のガジェット達が警戒を強める中、土煙から人影がゆつくりと歩み出た。

『バリアメール、各アタックツールの動作良好。フェイクリンカーコアによる魔力精製、65%にキープ。シンクロ率測定……88.7%、規定値をクリア。デューゴ”ナイトシフト”、スタート。』

メタリックグリーンにシルバーのラインが輝く全身鎧フルプレートで全身を包み、銀色の十字架を象ったような装飾が施された、メタリックグリーン

の兜と仮面により顔を覆った機械的なフォーム。左腕に装着された、鎧と同じカラーの盾付き銃を前方に向けて構え、一步一步土煙の中から歩いてくるその姿。

さながら姫を護る騎士のように。さながら戦地へ向かう兵士のように。ガシヤリガシヤリと金属的な音で地を踏み、敵であるガジェットを真っ直ぐに見据え、彼は告げる。

「デバイスヒューマン、デューゴ・ナイトシフト。任務、マスターヴィヴィオの守護と敵ガジェットの殲滅。これより、戦闘を開始する！」

緑の騎士は今、戦場にその姿を現した…！

襲撃」彼はその身を"鎧"に包む（後書き）

デューゴ・ナイトシフトについては、後々主人公設定を追加しますので、そちらに記述します。

…いやもう、台詞が厨二全開でほんとすいません。次回は戦闘回になります。文章搾り出して少しでも良い出来に仕上がるよう努力しますので、お楽しみいただければ嬉しいです。

では、また次回。

開戦〜少女の瞳に映る戦い〜（前書き）

初の戦闘回です。

開戦〜少女の瞳に映る戦い〜

気が付くと、ヴィヴィオの周囲は薄い緑色の光に包まれていた。周りの空間には光の粒子が漂い、自分はその中にプカプカと浮かんでいる。いくつかのモニターが目の前に展開されており、そこには触手やレーザーの砲門を構えたガジェット達の姿が映しだされている。中央のモニターの映像が動く。上下にすこしブレながら、まるで前進しているかのようだ。そのモニターを不思議そうに見つめていると、ヴィヴィオのいる空間にデューゴの声が響いた。

『マスターヴィヴィオ、聞こえますか？』

「え、デューゴさん？ どこ、どこにいるの？」

『マスターヴィヴィオはいま、自分とユニゾンしている状況です。いま自分は”外”に、マスターヴィヴィオは自分の”中”にいます。』

「……………ん？」

『：詳しい説明は後ほどいたします。とにかく、そこにいれば貴女は安全なので安心して下さい。ガジェットは、自分がこれから破壊いたします。』

そう言うと、再び中央のモニターが動く。画面の”誰か”が腕を伸ばしたかと思うと同時、ガジェットに向けて何かが発射される。命中したガジェットが爆発し、他のガジェット達が警戒をさらに強める。

それを見たヴィヴィオはようやく自分が置かれた状況を理解した。自分はいま、デューゴの身体の中にいるのだ、と。

- - - - -
- - - - -

「キャノンツール」

左腕に装備された円形の盾を構え、デューゴが言う。その音声に反応し、盾から砲身が伸びガジェット達へ向けられた。先に攻撃しようとしてレーザーを発射しようとするも、デューゴの攻撃の方が早くガジェットのうちの一体を捉える。キャノンから魔力弾を発射する同

時にレーザーを回避、移動をしながらさらにキャノンを連射してガジェットに着弾させていく。

A M Fが展開されている状況下では、ガジェット一体に対して数発の魔力弾を撃ちこまなければならない。一撃の威力を上げればその問題はクリアできるのだが、現状ではそれをする事は”できない”。なら、多少危険度が上がったとしても、A M Fの効果が無関係となる攻撃に切り替えるのがベストだ。そう判断し、デューゴが武装を変更する。

「スラッシュ、ホイールツール。」

デューゴの音声に反応し、右腕から50cm程の刃が伸びる。それと同時に、刃が電熱を帯びてオレンジ色の光を纏った。続いて、デューゴの両足の踵に魔力で形成されたタイヤ状の小型ホイールが現れた。それが高速で回転し、もの凄いスピードでガジェットとデューゴの距離を零にする。

無言で右腕の刃を振るう。電熱によって威力が高まった刃が、内部の機械ごとガジェットの装甲を一撃で斬り裂いた。ガジェットの破壊を確信しているかのように、小さく「次だ。」と呟いて別のガジェットへと狙いを定める。爆発と同時に、デューゴの刃は同じようにガジェットの装甲を斬り裂いていた。

「戦闘能力はこちらが上だ。数は多いが、このまま接近戦で押し切る。クラリオン、周囲の索敵は任せる。」

『了解。サーチ範囲を半径500mに固定。マスターヴィヴィオからの魔力供給は？』

「無しだ。マスターヴィヴィオに極力負担をかける訳にはいかない。フェイクリンカーコアからの魔力供給だけを継続する。」

『了解。』

兜を通じてクラリオンチャームへ指示を出し、ガジェットとの戦闘に再び意識を集中する。一体、また一体とガジエットを斬り伏せながら、撃ち出されるレーザーを盾で防ぎ回避する。半数以上のガジエットを破壊した時、ヴィヴィオから声がかけられた。

『デューゴさん、大丈夫？』

「大丈夫ですマスターヴィヴィオ、このまま押し切ります。体調などに異常は見られますか？」

『えっ、うつん、ヴィヴィオは大丈夫だよ！ どこも痛くないし……デューゴさん後ろっ！！』

「……っ！」

ヴィヴィオが急に声を上げる。ほぼ反射的に刃を後方へと振るうとなにかを切り裂いたような感触が伝わる。見ると、何本かの触手が斬り裂かれたガジェットが後方でレーザーの砲門を開く瞬間が見えた。ホイールを回転させて瞬時に距離をつめ、砲門ごとガジェットを両断する。即座に離れると同時に、斬撃を受けたガジェットが爆散する。

「的確な指示、感謝いたしますマスターヴィヴィオ。」

『そっか、デューゴさんの周りがこれに映るんだね。あっ、右からくるよデューゴさんっ！！』

「了解！」

ヴィヴィオからの指示を聞き後方へ跳ぶ。次の瞬間、数発のレーザーがデューゴのいた場所に殺到した。そのガジェットに向けて左腕のキャノンを数発放ち、そのまま近くにいた別のガジェットのカメラ部分へと突き立てた。ジジジ…と内部の機関が焼き切れる音を聞きながら、刃を引き抜き盾を前方へ構える。爆発の衝撃をそれで受け止めながら、ヴィヴィオへ声をかける。

「マスターヴィヴィオ、そのまま指示をお願いしますか？」

『が、頑張るっ！』

「フライングツール。」

ヴィヴィオの返答を聞き、デューゴが新たな機能を起動する。ホイールと同じく魔力で形成されたウイングが展開され、デューゴの身体が宙へと舞い上がる。上空からガジェット達を見下ろせる距離ま

で浮上すると、砲身を地上へ向けて構える。

「ショット。」

撃つ、撃つ、撃つ！ キャノンから雨霰と魔力弾を連射し、ガジェットの装甲を撃ち抜いて爆散させていく。嵐のような攻勢は反撃の隙を与えず、地上は濛々と立ち込める土煙に覆われる。

デューゴが射撃を止め、ザアツと音を立てた一陣の風が地上の土煙を吹き飛ばすと、地上には機能を停止したガジェットが各所にその残骸を散らばせていた。

「クラリオン、周囲に敵ガジェットの反応は？」

『サーチ……………反応無し。周囲の安全を確認しました』

「索敵により情報の収集を開始せよ。マスターヴィヴィオ、今後の指示を求めます。」

『うーんと…どうしたらいいんだろ。あつ、街の方は大丈夫かな。』

「クラリオン、どうだ？」

『市街地各所でガジエットの被害を確認。現在、時空管理局所属の魔導士が応戦している模様。』

『管理局！ デューゴさん、街の方に行つて。 ママたちがいるかもしれないの！』

「了解。」

ヴィヴィオの指示を聞き、デューゴは市街地の方向へ飛ぶ。眼前の空には、様々な色の光が飛び交っていた。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

「高町、ヴィヴィオはいたか！？」

「駄目、念話も電話も通じないのっ！ それに、この状況じゃ索敵もできない……。」

市街地上空でガジェットを掃討しながら、シグナムとなのはが言葉を交わす。先にクラナガンへと急行した二人だったが、予想以上のガジェットの数に行動を制限されてしまっていた。いくら自分の娘が危険に晒されている可能性があっても、市街地に被害が出てしまっている状況を見捨てる事はできず、なかなかヴィヴィオを探す事ができずにいたのだ。

アクセルシューターを操作しながらはやてへと通信を繋げようとしたその時、レイジングハートが何かを察知したのはに告げる。

『マスター、アンノウンの接近を確認しました。真っ直ぐこちらに向かってきます。マスターの後方、距離100mです。』

「アンノウン？ 一体何が……！？」

レイジングハートの言葉に自分の後方へ視線を向けたなのはの瞳が、近付いてくる何者かの姿を捉えた。

陽光を反射して緑色に輝く鎧を纏った人物が、凄いスピードでこちらへ向かってくる。管理局の魔導士だろうかとも考えたが、バリアジャケットとも騎士甲冑とも取れないその姿に、その考えは否定される。

やがてその全身が視認できる距離まで来ると、その人物はスピードを落としたのはの目の前で制止した。

「質問します。貴女は、”高町なのは”で間違いありませんか？」

「ふえっ？　そ、そうですね…あの、貴方は？」

「自分はデューゴ。我がマスターの指示により、貴方を援護します。」

「マスターって……あつ、ちょっとー！」

一方的に援護を宣言したその人物は、右腕に瞬時に刃を形成してガ

ジェットの群れへと突っ込んでいく。それを目で追うと、彼が一撃のもとにガジェットを破壊する姿が飛び込んできた。

左腕の盾でジェットの攻撃を的確にガードしつつ、その身一つで次々とガジェットを落としていく。なかば呆然となってその姿を見つめていると、シグナムが近付いてきて問い掛けた。

「高町、あれは誰だ？」

「分からないけど、敵ではないみたい。マスターの指示で私達を援護してくれてるみたいだけど……。」

「あの姿、ベルカの騎士に似ているが何かが違う。あんな目立つ姿、局員ならば我らが知らぬ筈はない。一体何者だ……？」

- - - - -
- - - - -

「少々数が多いか……。」

『いっぱいいるよー。』

それぞれに声を上げる。ヴィヴィオが遠目になのはの姿を見つけ、デューゴが指示に従ってなのはの援護を開始したのだが、どこから現れているのかガジェットの数が一向に減らないのだ。

このままではジリ貧になってしまう。先程の戦闘を考えると、これ以上はフェイクリンカーコアに負荷を懸けすぎてしまう。もし魔力供給に支障をきたせば、ヴィヴィオを危険にさらす可能性まで出てきてしまう。そう考え、意を決したようにデューゴがヴィヴィオへ提案した。

「マスターヴィヴィオ、いまから砲撃魔法にてガジェットを一気に掃討します。申し訳ありませんが、少し魔力を頂いても構わないでしょうか？」

『…いい、痛くない？』

「痛みはありません。…本当はマスターヴィヴィオに負担をかけたくはなかったのですが、自分が不甲斐ないせいで…申し訳ありません。」

『そんなことないっ！ デューゴさん、がんばってヴィヴィオのこ
と守ってくれてたもん！ デューゴさんのおかげで、ヴィヴィオど
こもケガしてないもん！』

「マスターヴィヴィオ……。」

『やろう、デューゴさん！ 悪い奴をやっつけて、街をこれ以上壊
させないようにしなきゃ！』

「了解、マスターヴィヴィオ！ クラリオン、クラスターツールを
使用する、チャージスタート！」

『クラスターツール展開、チャージスタート。威力を75%に制限、
マスターヴィヴィオのリンカーコアヘラインを形成、魔力供給を開
始。』

デューゴのアーマーの胸部が開き、アルファベットのXを象ったよ
うな胸部のレリーフが露わになる。デューゴの脳内に『ううっ……』
というヴィヴィオの声が響くと同時、レリーフが虹色の輝きを放つ。

魔力の高まりに反応した多数のガジェットがデューゴの前方に集ま
り、一斉にレーザーを放つ。身体中に襲いかかる衝撃を無視し、レ
リーフをガジェットの群れに向かって構える。

『クラスター、チャージ完了!』

「クラスターツール、ブラスト!」

『いつけええーっ!!』

ヴィヴィオが叫ぶ。その叫びを合図に、虹色の輝きを放つ一撃が胸のレリーフから巨大な砲撃を前方へ向けて撃ち出した!

レリーフと同じXを象った虹色の一撃が前方にいたガジェット全てを飲み込み、全てを爆散させる! やがて砲撃がおさまると、あれだけいたガジェット達は跡形も無く消滅していた。

それを見たからか、周囲に残っていたガジェットが一斉に撤退を開始した。追撃をする事もせず、デューゴはゆっくりと地上へ降下していった。

- - - - -

- -
展開していたウイングを消し、デューゴが地面へと足をつける。後を追うように地上へと下りてきたなのはとシグナムが、それぞれのデバイスをデューゴへと向けながら警告を発する。

「改めて…時空管理局、高町なのはです。武装を解除してこちらに投降してください。解除しない場合、貴方を拘束しなければなりません。」

「援護には感謝している。できれば手荒な事はしたくない。おとなしく武装を解除してはもらえないだろうか？」

「……………はい、分かりましたマスターヴィヴィオ。ユニゾンを解除しますので、彼女達への説明をお願いします…。」

「え、いまヴィヴィオって……！？」

なのはの驚きを無視し、デューゴはユニゾンを解除する。すると、元の人間の姿になったデューゴと、彼となのは達の間両手を広げ立ちはだかるヴィヴィオの姿が現れた。

「ヴィヴィオ!？」

「ママっ、デューゴさんにひどい事しないで！ デューゴさん、ケガしてるのにヴィヴィオを守ってくれたんだよ!？」

突然現れた愛娘の存在に驚愕するのは。そんな中、ヴィヴィオの後方に立っていた青年が地面へと倒れ込んだ。その音を聞き、ヴィヴィオが途端涙目になりながらその傍へて駆け寄る。

「デューゴさんっ!!」

「申し訳、ありま、せん……。マスター……。意識維持、困難……。一時、機能を、停止……。致します……。」

『生命維持を最優先。フェイクリンカーコアからの魔力を回復へ廻します。デューゴ、スリープモードへ移行します。』

倒れ込む青年と泣きながら彼にすがりつくヴィヴィオを交互に見ながら、なのはは困惑しながらもはやてへと通信を送る。そのすぐあと、彼女の乗るヘリがなのは達のいるポイントの上空へと移動してきた。

こうして、騎士は辛くも勝利を得た。戦いの火蓋を切って落とされ、いまは眠る青年と小さな姫を中心に、大きなうねりとなって回り始めたのであった…。

開戦〜少女の瞳に映る戦い〜（後書き）

展開を急いしまい、結果説明ばかりの回になってしまった感じが
なめません。まだまだ精進いたします。

感想やご意見、お待ちしております。

調査「彼の"普通"と彼女の"異常"

みなさん、地震は大丈夫だったでしょうか？ 投稿が遅い事に焦り、かなりはしょった内容になってしまったような気がします…、反省しなければ。

それでは、お楽しみくだされば幸いです。

調査「彼の"普通"と彼女の"異常"

「ん……………」

目を開く。各部の駆動を実際に動かして確認し、次いで内部機関の確認を実行する。損傷は完全に回復してはいないが、動けない程ではない。真っ白なベッドの上から身を起こしながら、デューゴは周囲を見渡した。

清潔感溢れる室内に、ベッドや洗面台などが設置されている。医薬品の成分と思われる成分を空気中から感知し、医療施設の一室であると推測する。

自分の置かれた状況がある程度把握したデューゴは、瞳を閉じてサ―チ機能を起動する。

（クラリオンの反応……………確認。シグナルの発信を要請…クラリオンからのシグナルを確認、位置把握。）

ベッドから出て立ち上がる。歩行に支障が無いのを確認して、デューゴは部屋を出る。数分後、病室に入った看護婦の狼狽した声がそ

の階に響いた。

- - - - -
- -

「ヴィヴィオ、なんかそのペンダント、チカチカしてるわよ？」

「ふえ…あれ、ホントだ。なんだろう？」

病院の待合室、長椅子に座りながらジュースを飲んでいたヴィヴィオのペンダントの点滅に、付き添っていたティアナが気付いた。

デューゴが病院に運ばれる時に際し、ヴィヴィオが絶対に着いていくと言って譲らなかった為、付き添いの為に本局にいたティアナが呼ばれたのだった。なのは達はさきのガジェット襲撃の報告や対策会議があるため局へと戻り、いまは二人だけでデューゴが目覚めるのを待っていた。

『マスターヴィヴィオへ報告、デューゴからの要請を受理した為、シグナルを発信しています。』

「えっ、デューゴさん起きたの!？」

「ちよっ、ヴィヴィオ! それデバイスだったの!？」

二人が別々の理由で驚きに声を上げる。ヴィヴィオは椅子から立ち上がってキョロキョロとせわしなく周囲を見渡し、ある一点に焦点が合った瞬間、パアツと表情を明るくさせて両手をブンブンと振り始めた。

「デューゴさあーん!」

「マスターヴィヴィオ! こちらにおられましたか。」

嬉しそうに駆け寄るヴィヴィオの体を受け止めながら、デューゴは安堵の表情を浮かべた。怪我も無く元気そうな彼女の様子を確認し、彼女と目線を合わせるようにしゃがみ込むと、彼女の首にかかったクラリオンチャームを手を取った。

「クラリオン、現在の状況は？」

『現在地は、クラナガン市街の医療施設。周囲に敵の存在無し。マスターヴィヴィオの関係者”高町　なのは”からの要請が一件、事情聴取の為に時空管理局への出頭を願う、との事。』

「現状は把握した。マスターヴィヴィオ、ミス高町との関係を教えて頂けますか？」

「ママのこと？　なのはママは、ヴィヴィオのママだよ」

「マスターヴィヴィオのお母様…ご親族でしたか。了解、メモリーに登録しました。」

そう言うとデューゴは立ち上がり、後方で啞然としているティアナへ視線を向ける。それに気付いたティアナはハッと我に帰り、小走りに二人の元へと近付く。

報告によれば、彼はかなりの重傷を負っていると聞いている。しか

も、相当数のガジェットを一人で圧倒する戦闘能力の持ち主であるとの事だった。しかし、ヴィヴィオと話していた彼の様子からは、彼女が想像していた人間像とは違う印象を受ける。

ティアナが思案にふけっていると、デューゴが歩いてきた方向から看護師が慌てた様子で猛ダッシュしてくる姿が目に入った。

「い、いたあーっ！ ちょっとアナタ、勝手に病室を抜け出しちゃ駄目じゃないのー!!」

「歩行などの動作に問題は無い。それに、マスターヴィヴィオの安否を確認する必要がある……。」

「こっちはアナタの安否の方が心配なんですよっ!!」

「デューゴさん、勝手に来ちゃったの!?!」

「マスターの状況を把握する事こそが最優先事項でしたので。」

「自分の事を最優先にしてもらわなければ困りますっ!!」

「…何故そんなに怒鳴っているのだ？」

「なにこの状況……。」

- - - - -
- - - - -

「「「……………」」」

「マスターヴィヴィオ、口元が汚れております。」

「ん〜…♪」

デューゴがヴィヴィオの口元を服の袖で拭う。デューゴの膝の上でショートケーキを口いっぱい頬張りながら、ヴィヴィオは満面の笑みを浮かべ楽しそうにしている。

デューゴが目を覚ましたという連絡を受け、クロノをはじめとした面々はティアナに言って彼を本局へと案内させたのだが、ヴィヴィ

オが彼から離れようとしなかった為に一緒に連れて来てしまったのだった。デューゴも「マスターヴィヴィオの護衛をしなければ……。」と言って彼女をさっさと肩車してしまい、ティアナはしきりに「すいません。」と謝っていた。

はやて、クロノ、なのは、シグナム、フェイト、ティアナと、かつての機動六課の面々が彼の挙動に注意しながら、居住まいを正してまず根本的な質問を投げかけた。

「コホン……えーと、デューゴさん？」

デューゴが顔をクロノへと向ける。とりあえず無視はされない事を確認し、クロノは言葉を続けた。

「僕は時空管理局将校、クロノ・ハラウン。ここにいるのは全員、同じく管理局の局員だ。これから聞く君の情報はきちんと秘匿、保持されるから安心してほしい。まず、君の名前と所属を教えてくださいないだろうか？」

「自分はデューゴ、戦闘用デバイスヒューマンの完成体で、識別番

号はN0753。所属は無い。」

「デバイスヒューマン？」

「人口筋肉や金属骨子で人体スペックを上げ、擬似魔力供給機関”フエイクリンカーコア”を搭載し、魔導士としての資質の無い人間でも魔法を用いて戦闘を行えるよう改造を施された者の事だ。」

「人体、改造……！？」

その単語にフエイトが反応する。表情が強張り、デューゴを見る目に悲しみと憐れみがこもる。”造られた命”に過敏に反応してしまう彼女にとっては、まさに忌むべき事だろう。

そんな彼女の視線など意に解さないかのように、彼は表情を変える事なく微動だにしない。今度ははやてが質問する。

「デューゴさんを、その…改造したんは、どこの誰なん？」

「機密事項に相当するため、解答を拒否する。」

「まあ、せやるなあ……。それじゃあ、なんでクラナガンにおったかは聞いてもええ？」

「時空間転移によるものだ。元は別の場所にいたが、それも機密事項に当たる為、解答できない。」

「時空間転移……って事は、あのガジェット達と同じように、クラナガンの結界を越えて転移してきたって事なん？」

「肯定だ。」

「一体どんな方法で？」

「機密事項だ。」

「あらら……。埒があかな、こりゃ。」

はやてが頭を抱える。結局はいまのところ、彼の身体の概要と外部の人間であるという事以外なにも分からない。こつも機密機密と並

べられると、質問にも迷ってしまう。

はやての様子を見たシグナムが、厳しい顔付きでデューゴへと告げる。

「デューゴとやら……こちらでも組織の人間だ。お前から情報が聞き出せないのなら、強制的にでもお前を調べなければならなくなる。機密も分かるが、なんとか話してもらえないだろうか？」

「組織の人間ならば理解している筈だ。機密とは、秘匿すべき重要な事柄を示す。もし強制するというのは、抵抗する権利が自分にはある。」

「む……。」

「自分の身体の機構、フェイクリンカーコアの技術など、自分には秘匿すべき情報が山ほどある。それらを守るのは、自分に課せられた義務の一つだ。」

シグナムはそれ以上なにも言えず黙ってしまう。彼の言っている事は全て正論だ。組織という立場上、管理局にも機密というものは多

数存在する。ましてや、ヴォルケンリッターという自分の存在もまた、機密に当たるものだ。彼の発言の意味はよく分かる。

と、突然パンツと机を叩く音が響く。見ると、フェイトが身を乗り出すようにして彼を睨みつけていた。デューゴの膝の上にいたヴィオはビクツと身体を強張らせた。その様子にも眉一つ動かさず、彼は静かにフェイトを見た。

「どうして……。」

「……………」

「どうして庇うの！？ 貴方の体を改造した人間の事でしょ、そんな機密なんて守る必要無いじゃない！ 人体改造なんて、正常な人間のやる事じゃないよ！ なんてそんな奴を……！！」

「黙れ。」

一蹴。ただ一言を発し、デューゴはフェイトを睨みつける。その目が語る明確な怒りが、フェイトを押し黙らせた。自分は正しい事を言っている、なのに何故彼はこんな目で自分を見ているのか？ 訳

が分からず困惑してしまっ。

彼は膝の上のヴィヴィオの頭に手を置き優しく撫でる。フェイトがヴィヴィオへ目をやると、恐怖で涙目になってしまっていた。その様子にハツとし、バツの悪そうな表情を浮かべて目を逸らす。

「…自分の力は、”今”の自分の誇りだ。それを、他人のお前に咎められる理由などない。機密を守るのも同じく、お前に責められる事ではない。」

「で、でもっ……！」

「くどい。お前はもう喋るな、マスターヴィヴィオが怖がっている。」

そう言うと、デューゴはそれ以上フェイトと目を合わせなかった。フェイトも、他の誰も言葉を発する事ができない。フェイトの憤りも、デューゴの言う事もどちらも理解できるからこそ、誰も何も言えないのだ。

沈黙が室内を支配するなか、渦中のデューゴが口を開いた。

「こちらにも聞きたい事がある。マスターヴィヴィオのことだ。」

「ヴィヴィオの、こと？」

「…あのガジェットドローンと戦闘していた際、気付いた事がある。やつらの攻撃目標は、確実にマスターヴィヴィオだった。何故ガジェットがマスターヴィヴィオを狙う？」

「ヴィヴィオを狙ってたって…それホントなの？」

「本当だ。あの時、やつらは負傷していた自分ではなく無傷のマスターヴィヴィオを狙い攻撃を仕掛けてきた。目標が始めから設定されていた可能性は大だ。」

「……まさか、でも…。クロノ提督、もしかして”例の”？」

「僕もそれを考えていた。もしアレ絡みならば、ヴィヴィオを狙う理由も頷ける。」

「”アレ”？」

デューゴの質問に何かを思案するティアナとクロノに、他の面々が首を傾げる。それを見て、デューゴがヴィヴィオを肩車して席を立った。ヴィヴィオはキョトンとした表情を浮かべ、なのは達は彼を見る。

「少し席を外す。心配ならば誰かを監視に付けても構わない。そちらの話が終わったら呼んでくれ、解答はその時に聞く。」

「あつ、ちよつ……！ クロノくん、私が行ってくるね！」

一方的に告げて部屋を出ていくデューゴをなのはが追う。呆氣に取られていたクロノは、ハアと溜め息をついて周りを見回した。空気を読まれた……と思いながらも、元々はやて達にも助力を願おうと考えていた為、クロノは口を開いた。

「全員聞いてくれ。これから話す事は許可があるまで絶対に外部に

漏らさないでもらいたい。」

「な、なんやねん、急に……。」

「これは、ある二つの”ロストログア”についての話だ……。」

- - - - -
- - - - -

局員用の休憩スペースの椅子に、三人は並んで座っている。デューゴとなのはに挟まれる形で座っているヴィヴィオは、先程ジューズを買ってもらってご満悦だ。

ヴィヴィオの胸元にかかったクラリオンチャームが、陽光を反射してキラリと光る。それを見たなのはが、スツと目線をデューゴへと向けた。

「デューゴくん、ヴィヴィオのマスター登録って解除できないのかな？」

「マスターの登録解除を行えるのは、クラリオンチャームの制作者である博士だけです。自分にはその権限は与えられておりません。」

「そっか…。」

不思議と、なのはにはそれほど落胆は無かった。色々理由はあったが、一番の理由はデューゴのヴィヴィオを見る視線だった。

彼の言うようにあのガジェットがヴィヴィオを狙ってきたのであれば、母親としてヴィヴィオを守るのはなのはの役目だ。しかし、実際にヴィヴィオを守ったのは彼だった。あの数のガジェットを相手に、ヴィヴィオに傷一つ負わす事無く守りぬいたのだ。

それが単にマスターを守る為のプログラムであるならば、”兵器”である彼にヴィヴィオを任せる訳にはいかない。兵器とは即ち武器、いずれヴィヴィオにその牙を向けてしまう可能性がある。しかし、彼のヴィヴィオを見る瞳は、ヴィヴィオへの慈しみが籠ったものだとなのはは感じていた。

彼がどのような経緯でサイボーグとなったのかは分からない。だが、その瞳には確かに意思を感じ取れる。彼は兵器などではないと、なにか確信めいたものがなのはの頭にはあった。勘と言われればその通りだが…。

「ねえ、デューゴくん…?」

「なんでしょうか？」

「ヴィヴィオの事、本当に守ってくれる？」

真っ直ぐ、ただ真っ直ぐにデューゴを見つめて問う。その視線を真っ向から受け、デューゴはなのはへと告げた。

「自分はマスターヴィヴィオの鎧です。マスターを守る事が自分の使命、自分はその為にいまこの世界に存在しています。たとえこの身が砕けようとも、マスターヴィヴィオは傷付けさせません。」

「約束できる？」

「はい、必ず。」

その目に迷いなど一切無い。それこそが自分の使命であると、彼は

言った。その言葉には、”人”としての確かな感情と決意が感じられた。なのはは確信する、彼は兵器ではない。彼は必ずヴィヴィオを危険から守ってくれる。

確証なんて無い。だが、彼ならば大丈夫だと、なのはの心が告げていた。

「…ヴィヴィオをお願いね、デューゴくん。はやてちゃん達の説得、私も手伝うから。」

「感謝いたします、ミセス高町。」

「みつ、みせすっ!？」

急にミセスと言われ、なのはは顔を真っ赤にしてわたたとデューゴへ自分の説明を始めた。デューゴは彼女の説明を、しきりにウンウンと頷きながら聞いている。

だから、二人とも気付かない。いつの間にかジッとデューゴを見つめるヴィヴィオの瞳が、淋しさに揺れている事に。

ヴィヴィオが視線を自分の掌へと落とす。その手はゆっくりと包み

込むようにクラリオンチャームへと動き、ギュツと力を込めてチャームを握りしめた。いまだ頭の上で二人が喋っている中、ヴィヴィオは小さな決意を固めるのだった…。

器”"虹”"と”"黒”"”（前書き）

今回はちょっとした説明会のような話です。文章、ちよつとくどい
のかなあ…。

それでは、お楽しみください。

器”"虹"と"黒"”

先ほどまでデューゴの調査が行われていた執務室。はやて達はある人物からの通信を待っていた。説明を始める前に参加してほしい人物がいると、クロノが通信要請をしたのだ。

ほどなくして、空中に二枚のウィンドウが展開される。その片側のウィンドウに映る見知った顔に、はやてが声を上げた。

「か、カリム!？」

『久しぶりですね、はやて。みなさんもお久しぶりです。』

「シスターカリム、再開を懐かしむのはあとで。まずは彼をみんなに紹介しないと...。」

クロノはそう言うと、カリムが映るのと反対側のウィンドウに目をやる。その場の視線がそのウィンドウに映る人物へと移動する。

管理局の制服に身を包み、白髪混じりの髪をオールバックにした初老の男性。やや切れ長の目が、どこか鋭さが伺えるような印象を与

える人物だった。

『初めまして、と言うべきかな。私は君達の事を一方的に知っているからね、どうも初めてという感覚が無いんだ。』

『みなさん、ご紹介いたします。時空管理局からの臨時出向で、聖王教会管理運営部の副理事をなさっていたでいる、マクセル・フォン少将です。』

『マクセル・フォンだ。管理局では監査部に所属している。もつとも、今は少将というより”神父”という肩書きのほうがしっくりくるがね。』

カリムからの紹介を聞き、その場の全員が居住まいを正し敬礼する。マクセルも敬礼を返すと、彼女達に楽ししてくれと伝えた。

監査部のマクセル・フォン少将といえば、局内でもかなり有名な人物だった。近代ベルカ式を用いた高い戦闘能力に加え、有事の際の指揮官としても有能な人物としても名高い。管理局に異動になった後も礼拝を欠かさない、敬虔な教会信者でもある。

予想外の人物の登場に面食らってしまったっている面々を横目に、クロ

ノが話しはじめた。

「一ヶ月ほど前、シスターカリムとフォーン少将から秘密裏に会談を申し込まれたんだ。会談の内容は、あるロストロギアの探索と回収を請け負ってほしいとの事だった。」

「…もしかして、さっき言っとったやつのこと？」

「ああ。”虹の杯”と”黒の杯”という物なんだが…事と次第によつてはJ.S事件を超える程の大事件に繋がりがねない代物だった。僕はこのロストロギアの探索を、フェイトとティアナ、それにギンガへと命じたんだ。」

そう言い、クロノは二人へと視線を向ける。二人は小さく頷くと、大きなウィンドウを展開する。そこに映っていたのは、一冊の古ぼけた分厚い書物だった。

「これは聖王時代のベルカの伝承などが綴られているものです。この書物の中に、その二つのロストロギアについての事が記されてい

ました。」

ティアナはそう言うところスミラーージュを通じてウィンドウを操作する。次に映されたのは書物のページとおもわしき画像だった。古代ベルカ文字で書かれた文章を見て、シグナムが全員に通訳するように読み上げる。

「王の死後、その力を込めし魂の破片を二つの器へと封ずる。虹の杯はその輝きにて天を開き、黒の杯は闇の帳と静寂を人々に与えた。虹の強すぎる輝きは黒が包み、黒の常夜の闇は虹が輝き照らす。二つの器揃えし世界、強大なる力と安寧なる未来を得た。」

「これは”双天伝承”と呼ばれる一説です。歴史研究者達の間では、単なるお伽話の一つであるとされていたものなんですが…。」

『半年前、聖王教会が管理するある世界の遺跡にて、この虹の器に関する証拠文献が相次いで見つかったのだ。』

ティアナの言葉をマクセルが受け継ぐ。ウィンドウには書物の映像

の他、これまでの調査の経過や双天伝承に関するデータが展開されている。

『双天伝承というのは、聖王オリヴィエが没した後のベルカの逸話なんだが、いわゆる聖王の名を使った民間伝承の類だと目されていたものだ。だが、その文献の出土によって双天伝承について数々の情報が出てきたのだよ。それに、我々は聖王時代の遺物をこの目で直に見てしまっているからね。教会としても無視する訳にはいかないのだよ…。』

双天伝承…、”聖王”と称された女性「オリヴィエ」の死後、その強大な魔力を二分し、片方を”虹の杯”と呼ばれる器に、もう一方を”黒の杯”と呼ばれる器にそれぞれ封じ、争いに傷付いた世界をその力によって復興の礎としたという言い伝えだ。復興後、その強大な力の悪用を恐れた当時の賢者達によって二つの器はどこかへと封じられ、遠く離れた異界の地で長い眠りについたとされている。

眉唾な話ではあるが、その場にいる面々はかつて「闇の書事件」や「JS事件」などで、数々の歴史遺物を目にしている。神妙な面持ちの全員を一瞥し、クロノが口を開いた。

「もしこの二つの器が存在していた場合を考え、フェイトとティアナに器の搜索を秘密裏に命じたんだ。だが、その搜索任務の中で、奇妙な情報を掴んだ。」

「奇妙な情報？」

「二つの器のうちの一つ、黒の杯を追っているという人間達がいるという情報だ。調査の結果、それが違法研究者の集団であるという事を突き止めた。」

「違法研究者……あれ、最近どこかで聞いたな？」

「昨日、とある無人世界で奇妙な爆発が起きた。推測でしかないが、おそらく僕達が追っていた違法研究者達の研究所だったと睨んでいる。マークしていた何人かの人物が、その無人世界に出入りしていたという証拠も掴んでいたんだが……。」

「検挙する前に、調べるべき場所が爆発してもうた、と。」

『事態を考慮したクロノ提督と私はこの二つの器をロストログアとして認定、正式な任務として着手する事になった。そこで、君達の出番という訳だよ。』

マクセルの言葉を受け、クロノは一枚の書類をはやてへと手渡した。受け取った書類の書き出し部分には一言、【機動六課再編について】と書かれている。

はやてが驚愕に目を丸くしながらクロノを見る。クロノは小さく頷くと、その場の全員へと告げるように宣言した。

「今日ここに、機動六課再編を明言する！ 後見人は僕以下、マクセル・フォーン少将とカリム・グラシア理事だ。既に三提督の了承も取り付けている。八神はやて二佐を中心とし、早急にスタッフを召集してもらいたい！」

「機動六課の……！」

「再編……！」

『任務はロストログア、虹の杯と黒の杯の搜索。及び、黒の杯を追う違法研究者達の検挙だ。JS事件の傷痕は未だ癒えず、君達も多忙な日々を過ごしているとは思う。だが、次元世界の平和を脅かす芽は速やかに摘まなければならない。すまないが、力を貸してくれ！』

そう言うと、マクセルは彼女達に頭を下げた。少将という地位にある人物が頭を下げるなど、通常ならば考えられない。それほどこの件を危険視しているという事なのだろう。

はやては力強く一度頷くと、いまだ頭を下げつつけるマクセルに対し敬礼、決意の籠った声で伝えた。

「了解！ 八神はやて以下、新生機動六課一同、この任務に全力を尽くします！」

その声に、その場の全員が力強い敬礼で同意を伝える。マクセルは頭を上げ、感謝の意を込めて敬礼を返した。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

「六課の再編!？」

クロノからの通信で執務室へと呼び戻されたのはは、はやてとクロノからの説明に驚愕した。デューゴとヴィヴィオはなんの事か分からない為に首を傾げている。

先程の事があるからか、フェイトはデューゴと目を合わせる事が出来ずにいた。デューゴはそんなフェイトの様子も意に解さず、自らの疑問をクロノへと尋ねた。

「その六課とやらの件に関して、何故自分とマスターヴィヴィオを呼んだのだ？ マスターヴィヴィオも自分も管理局の局員ではない、無関係の筈だが。」

「いや、ヴィヴィオも君もこの件に関して無関係とは言えない。先程君から質問された事にも関係することだからな。」

「ガジェットドローンがマスターヴィヴィオを狙った理由か？」

「いま説明した通り、今回六課が追う事になるロストログアは、聖王オリヴィエに関する物だ。もしガジェットが現れた事がこのロストログア絡みの事であれば、ヴィヴィオがまた狙われる可能性がある

る。」

「…どういう意味だ？」

「ヴィヴィオは…聖王オリヴィエのDNAから産まれたクローンだ。」

「…！？」

クロノの発言に僅かに驚きを見せたデューゴは、真実かどうかを確認する為にヴィヴィオを見る。ヴィヴィオは悲しそうな表情でコクリと頷いた。

成る程、とデューゴは理解する。ガジェットがクロノの言うようにロストロギア絡みの者達の差し金であるならば、また襲ってくるという可能性は高い。勿論、ガジェットなどに負ける事などデューゴの性能であればゼロに等しいが、ヴィヴィオを危険に晒さずに済むのに越した事は無い。

「マスターヴィヴィオの命を守る為、機動六課に協力せよと？」

「ああ。協力できなくとも、君達を保護させてほしい。身柄の安全は僕が保障する。」

「……………」

デューゴが沈黙する。考え込む訳でもなく、ただ黙ったままジッとクロノを見つめる。数秒の後、デューゴは目を一度閉じると、再び目を開いてクロノに告げた。

「はっきりと事実を言ったらどうだ。自分の何を疑っている？」

「っ!？」

「言いづらいのならば一つ事実を提示しよう。自分のデータベースには、黒の杯という物についてのデータが確かに存在する。機密事項に該当している為情報を開示する事は不可能だが…。」

「なっ、ほんなら…!？」

「自分を改造したのは、お前達の言う違法研究者達だ。彼らに決まった組織名など無く、リーダーなども存在しない。…聞きたかったのはこれが、クロノ・ハラウン？」

「やはり、か。もしやとは思っていたが…。」

デューゴが告げた情報を聞き、クロノは苦い顔をした。数々の事柄のタイミングを考えれば容易に想像の着くような事ではあったが、こうもはっきりと言われてしまうと対応に戸惑ってしまう。

聖王の力をその身に宿すヴィヴィオと、黒の杯を追う研究者達に作られたデューゴ。まるで運命のままに引き合ったようだ、とクロノは考えていた。彼とて捜査官を経験した身だ、己の心の内を晒さない事など造作も無い。

だが、現実には彼はクロノの疑念を言い当てた。彼への説得を試みるために口を開こうとしたその時、局内に非常用アラームが鳴り響いた。

「なんだ!？」

『局員に通達！ クラナガン市街地に再び転移反応多数。巡回中の局員からの報告により、ガジェットドローンの出現を確認。武装局員は直ちに出勤せよ！ 繰り返し……。』

「くっ、またガジェットか…はやてっ！」

「了解や、シグナムとなのはちゃんを中心に2チームでガジェットの迎撃に当たって シグナムのチームにはフェイトちゃん、なのはちゃんのチームにはティアナや。私は現場の指揮を担当、ええな？」

「……了解っ！」「……」

はやてが全員に素早く指示を与える。その指示を受けて他の面々が執務室を出ようとしたその時、部屋の中にヴィヴィオの声が響いた。

「ユニゾンっ！」

「なっ、マスター！？」

『マスターヴィヴィオからのユニゾン要請確認。デューゴ、ユニゾンイン。』

クラリオンチャームから電子音声が発せられた直後、緑色の光がデューゴとヴィヴィオを包み込む。突然の事に全員が足を止めて目を見張った。光が止むと、先程なのはとフェイトが市街地で見た緑色の鎧を身に纏ったデューゴの姿があった。

『デューゴ・ナイトシフト。』

「マスターヴィヴィオ、何故急にユニゾンを……。」

『行こうデューゴさん！ 街を、みんなを守らなきゃ！』

デューゴとユニゾンしたヴィヴィオの悲痛な声が、デューゴの頭へと響く。なのはやフェイトが止めようとする姿がヴィヴィオの眼前のウィンドウへと映るが、それを決意の籠った目で見つめ、もう一

度ヴィヴィオは声を張り上げた。

『デューゴさんお願い、みんなを守りたいの！ お友達も、街の人
も、みんなみんな守りたいの！！』

「…了解。ミッション、市民の防衛とガジェットの撃退。デューゴ、
これより出撃する！」

そう言うと、その場の人間の制止を振り切り、執務室の窓を破りフ
ライングツールを起動する。そのまま、全速力でクラナガンの市街
地を目指し急行する。

緑の騎士は主の望みの為、二度目の戦場へと降り立つのであった…。

守護く姫を守る"鎧"、騎士を護る"鎧"

本当に久々の更新です。

守護、姫を守る"・鎧"、騎士を護る"・鎧"

「スラッシュツール！」

高熱を帯びた斬撃がガジェットの装甲を切り裂く。内部の機械がバチバチと弾け、数秒の後に爆発を起こす。その爆発など気にも留めず、デューゴは前方に広がる光景を注視する。

辺り一帯でガジェットを掃討する為に管理局の魔導士達が飛び交っているが、一定のタイミングで発動される転移魔法によりガジェットの追加投入されているためにキリが無い。

クラリオンチャームからの報告で、このクラナガン一帯を防衛する為の結界が破損している事が確認されている。結界自体の強度から考慮するに、そうそう破られるような物ではない筈だ。

（やはり内部から崩された可能性が高いな。しかし…。）

明らかにガジェットの動きが前回とは違う、とデューゴは感じていた。前回の襲撃に関しては、ヴィヴィオを追うことを主目的に設定されているように思えた。その証拠に、自分がガジェットに接近すると、周囲のガジェットが自分をターゲットとする傾向が見て取れたからだ。

しかし、今回に関して言えば目的はまったく別。純粋な破壊活動に従事しているように見える。しかも、投入されている数は前回以上だ。現在進行系で増加するガジェットに、局員達もやや統制が取り切れていない。

『デューゴさん…？』

「…っ、申し訳ありませんマスターヴィヴィオ。体調に変化などはありませんか？」

『うん、わたしは大丈夫。それより、早くみんなやつつけないと！』

「了解しました。引き続きミッションを続行します！」

デューゴはそう言うと一度地上に降りてホイールを起動する。周囲

の道路や壁が所々崩れてしまっているが、ホイールでそれを跳ね飛ばしながら走行する。

ある程度開けた場所まで移動すると、ウィングを展開して再び空中へと浮かび上がる。クラリオンチャームからの索敵の結果を受け、指定座標にいるガジェットヘキャノン放つ。命中したガジェットは爆散、同時に複数のガジェットの群れがデューゴの元へと押し寄せてくる。

先程からこれの繰り返しだ。住民や市街の建物から注意を逸らし、多数では無いにしても確実に数を減らしていく。局員達の誘導で住民は次々と避難していくが、まだまだ人数は膨大だった。スラッシュツールで群れの最後の一体を切り伏せたデューゴは、再び地上に降りて移動を開始する。

「クラリオン、ガジェットの現在の総数は確認できるか？」

『現在確認できるガジェットと思われる熱源は168体。召喚が続いている為、総数を断言する事は不可能。』

「召喚師を捕縛、または撃退するしかないか。マスターヴィヴィオ、一つ質問をよろしいですか？」

『うん、なあに？』

「空中以外で、この街を一望できるような場所がありますか？」

「んー……あつ！ 見えるか分からないけど、一番高い丘があるよ。」

「丘陵か…クラリオン、クラナガンが一番高い丘に索敵を集中。生態熱源、及び儀式魔法の類の反応があるか調べる。」

「^{サーチ}索敵………熱源確認、人間が一人。ここから西に1キロにある丘陵中央の人工林の中だ。」

「了解っ…！」

目指す丘の座標を確認し、デューゴは走行速度を上げてガジェット
の妨害を避ける為に地上を疾走する。バリアメールの効果により視覚
範囲が広がったその視線の先には、小高い丘と深緑の小さな林が映
っていた。

- - - - -

その男にとっては”誤算”としか言いようがなかった。”あの男”が何もしない訳は無いとは思っていたが、まさか唯一の”例外”をこの地に送り込んでくるとは思わなかったのだ。

第三研究所の爆発は、十中八九あの男の仕業だろう。しかし、まさかオリジナルを脱出させているとは思わなかった。しかもマスターまで見つけだしているとは、完全に予想の範疇を越えている。

いくら無尽蔵にガジェットを呼び出す事が出来るとしても、先にこちらの魔力が尽きれば打つ手が無くなる。手詰まりになる前に自分だけでもミッドチルダから撤退しなければ、下手をすれば命を落とす可能性もある。

男が自分の魔力を一際練り上げる。魔法陣がいくつも展開され、クランガンの各地に大量のガジェットが呼び出された。対応に追われる管理局がこちらに気付くような気配は無い。あとは”代弁者”からの指示を待つて撤退すればいい。

男がそう考え通信ウィンドウを開こうとした瞬間、男の足元に一発の弾丸が着弾し土煙を上げる。突然の事に狼狽する男の眼前に、左腕の盾砲を構えた緑色の鎧を纏う騎士が降り立った。

「武装を解除しろ。貴様が下手な真似をした場合、こちらには貴様

を攻撃する用意がある。」

「なっ… N O . 7 5 3 ! ?」

- - - - -
- - - - -

「自分を知っているという事は、” 機関 ” の関係者か？」

「くっ… ! !」

デューゴの疑問には答えず、男は手に持ったデバイスを構え後ずさる。先程感知された召喚魔法の反応から考えるに、今回の襲撃がこの男の手によるものだという事は間違いない。

周囲の警戒をしつつ、デューゴは男に再度質問する。

「何故機関がクラナガンを狙う？ 今回の襲撃の目的はなんだ？」

「機関の目的はただ一つだ、お前ならば分かっているだろう！」

「…自分にはマスターを守る使命がある。貴様達の目的の過程でマスターが傷つく可能性があるならば、たとえ機関の人間であろうとも容赦はしない。」

「くっ…戦闘マシン風情が偉そうにぬかすなあっ!!」

男の持つ杖型のデバイスから魔力弾が打ち出される。質より量でガトリングガンの如く掃射される魔力弾を防ぎながら、デューゴがホイールを起動する。

男の体型とこの戦法から考えるに接近戦は不得手と考えたデューゴは、シールドを構えたまま相手との距離を詰め、腹部に一撃を見舞った。

「がっ……!!」

「バインドツール。」

不意の一撃にたまらず後退した男を、デューゴがすかさずバインドで拘束する。手足にロープ状の光るバインドが巻き付き、男は地面に転がされた。男の足元に転がったデバイスを回収すると、デューゴは視線を街の方へと移しながらクラリオンに確認を取る。

「クラリオン、状況は？」

『召喚魔法の停止を確認、ガジェットドローンの残機は211体。事態の収束にはまだ時間がかかる模様。』

「そうか。」

『デューゴさん、あの人はどうするの？』

「こちらの必要な情報を聞き出してから管理局に引き渡します。気になる事柄が幾つかありますので。」

『…痛い事は、しちゃダメだからね？』

「…了解です、マスターヴィヴィオ。」

そう言うとデューゴは男の方に向き直る。男は顔面蒼白となり、聞き取れないような声で何事かブツブツと呟いていた。デューゴが近付くと、ビクリと身体を震わせて恐怖に染まった視線をデューゴへと向けた。

その視線を無視し、男の衣服の中をまさぐる。通信機器や”機関”に関する何かを持っていれば、そこからクラリオンを使って情報を辿る事ができると推測しながら、男の全身を調べていく。

『うわぁ…なんかくすぐったそう。』

場違いな呟きをするヴィヴィオの声を聞きながら、デューゴは男から手を離す。持ち物の中には特にそれらしい物は無く、男の表情から何かを隠しているような様子は見受けられない。

（と、なると……。）

デューゴは自分が握っている男のデバイスへと目を向ける。男自身
が何も持っていないとなれば、あとはこのデバイスしかない。

機能停止状態のデバイスを眼前へと持っていく。デューゴが、融合
状態にあるクラリオンを介してデバイスへとアクセスし、情報収集
を開始しようとする。その瞬間、男が力の限りの声で叫ぶ！

「危険信号うっ！！（エマージェンシーシグナル）」

「っ！？」

『ふえっ！？』

突然の叫び声にデューゴとヴィヴィオが驚きの声を上げた瞬間、デ
バイスの先端に付いた宝石が激しく明滅を شدした。すると、クラ
リオンの音声がデューゴの頭の中に響く。

『警告！ 数十機のカジエットドローンがこちらに向けて進行中、
接触まで約二分。』

「くっ……！！」

「ふっ…ふはははっ！ 機械人形のくせに詰めが甘いなあっ、ええ
っ、No.753よおっ！！」

男が勝ち誇ったように笑い声を上げた。デューゴが街の方へ視線を
向けてサーチすると、無数の熱源がデューゴのいる丘へと向かって
きているのが分かる。

本来は自分の位置を仲間へ知らせる救難信号の役目を持つ危険信号
を、カジエットドローンへのサインとして使用する。情報収集の為
とはいえ、男の目の前でデバイスを起動したのが最大の失策だった。

デューゴは男が身動きが取れないのを再度確認すると、ウイングを
展開して空へと上がる。次いでスラッシュツールとキャノンツール
を同時起動し、自身に向けて押し寄せるカジエットを見据えて攻撃
体制を取る。

『デューゴさん……。』

「マスターヴィヴィオ、ご心配なく。貴女は、自分が命に代えても
お守りいたします。」

キャノンの砲身を眼前に迫るガジェットへと向けながら、ヴィヴィ
オにそう告げるデューゴ。それを聞き、ヴィヴィオはギュッと自ら
の手に力を込めた。

- - - - -
- -

「ふっ…ぐうっ……!!」

自身を拘束するバインドを解こうと男はもがく。デューゴは既にこ
の場にはいない。となれば、早くここから撤退して、デューゴの存
在を機関に報告しなければならぬ。

（まさか、管理局の手ににデバイスヒューマンが渡るとは……。早急に手を打たなければ、”アレ”の存在に気付かれてしまう可能性もある……。）

「随分と情けない格好ねえ、ミスターMister?」

「……っ!」

倒れていた男の頭上に影が差し、女性の声が響いた。男はビクリと体を震わせ、再び顔を蒼白にして恐る恐る頭上の女性を見上げる。黒みがかった緑色のロングヘアを風にたなびかせ、槍程に長い杖を携えた妙齡の女性がそこに立っていた。

「りっ、リシャ……っ!」

「……ん？」

「あつ…み、ミス…リシャル…。」

「んふふ、そうそう。女性を名指しだなんて紳士としてあるまじき行いよ、Mister？ まあ、それはさておき……。」

そう言うと、リシャルと呼ばれる女性は空へと目を向ける。上空では、自身に殺到する多数のガジェットを相手に戦うデューゴの姿があった。多少の改造は加えてあるものの、いくら数を揃えたところで所詮はガジェット。デューゴを撃墜するにはいたらないだろう。

その光景に妖艶な笑みを浮かべたリシャルが、それから目を放すことなく男に尋ねる。

「あれは、デバイスヒューマンね？ マスターは誰？」

「ま、マスターは確認できていません…。」

「ふん、そう。あの装備やフォルムから見ると、まず間違いなく

Dr・マナーハイムの作品ねえ。って事は、マスターになるには相当の魔力量が必要なはずだし、擬似リンカーコアタミもかなりの高性能な物が使われてるわよねえ…。」

まるで興味津々な玩具を見つけたように爛々と目を輝かせ、リシャルはブツブツと自身の予測を口にする。その間も、男はガタガタと震えながら彼女の言動を注視していた。

すると、彼女は思い出したかのような表情で男に目をやり、冷笑を浮かべながら告げた。

「…ああ、ごめんなさいねMister? 貴方のこと、すっかり忘れてた。」

「ヒッ…!?!」

「待っててね、いま斬ってあげるから。」

ザシュッ!

男の体を縛っていたバインドが、”男の胴体ごと”両断される。リシャルは杖の刃に付いた男の血を振り払うと、再び微笑みを浮かべてデューゴへと視線を戻す。

「んふふ…さあ、貴方は当たりなのかしら、Boy？」

その声は突如拭いた一陣の風に掻き消される。その風が止んだ時には既にリシャルの姿は無く、事切れた男の死体がただそこにあるだけだった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ヴィヴィオは眼前のモニターを食い入るよう見つめていた。握りしめた掌にはじっとりと汗をかき、懸命に自分に何か出来ないかと考えていた。

その間にも、デューゴがまた一機ガジェットを撃墜する。スラッシュツールを起動し、近接戦闘を主体に攻撃を繰り返している。下手に砲撃に切り替えると、どんどん集まってくるガジェットの群れに

集中砲火を浴びかねないし、市街地への攻撃を防ぐ為に足場の無い空中で戦うしかない。

そんな限定された戦場であっても、デューゴは冷静にガジェットに対処していた。一機、また一機とガジェットを撃墜しながら、「大丈夫ですか、マスターヴィヴィオ？」とヴィヴィオを気遣っていた。

ヴィヴィオはいま、何もできていなかった。ただ安全な場所で、自分を命懸けで守ってくれているデューゴの戦いを見ている事しか出てこない。それがたまらなく悔しかった。誰かが傷付き、誰かが泣いている今この時になにもできないのが、本当に悔しかった。

「うつ…ふうつ…ぐす…」

『マスターヴィヴィオ…！？　どこか痛めたのですか、何故涙を！？』

不意に零れた嗚咽を聞いたデューゴが、何事かと声をかける。その行動は”隙”、一瞬動きが止まったデューゴに複数のガジェットから触手のようなケーブルが伸びる。それらがデューゴの手足を搦め捕り動きを封じにかかる。

デューゴが気付いた時にはもう遅い。ガジェット達はケーブルを伝い電流をデューゴの体へと流し込んだ。

「ぐがああああっ!!」

『デューゴさあんっ!!』

「くっ、クラリオン…マスターヴィヴィオに、補助…フィールドを……!!」

『了解。補助フィールド発動、マスターヴィヴィオをコーティング。擬似リンカーコアの出力を88%までアップ。』

補助フィールドとは、内部に取り込んだマスターをデューゴ自身の魔力を込めた膜でコーティングし、有事の際には離れた場所へと転移させる事ができるシステムだ。

デューゴの思考回路は、常に最悪の自体を想定して答えを弾き出す。本来ならガジェットが何機相手であっても負けなどしないが、この限定的な戦場と擬似リンカーコアの魔力だけを使った戦闘では、一瞬たりとも隙など見せてはいけなかった。

この状況は彼にとってミス以外のなにものでもない。そのミスで、マスターの身を危険に晒す訳にはいかない。せめて、ヴィヴィオだけでも危険から遠ざけなければ…。

『デューゴさん、前っ！！』

「ぐうつ……！？」

ヴィヴィオの声に反応し前方を向く。見ると、十数機のカジエットがレーザーの砲門を一斉にこちらに向けていた。エネルギーが集束され、チャージされたレーザーが間髪入れずに掃射される。

腕に、脚に、胴体にと数多くのレーザーが着弾し、爆発を起こす。それでもケーブルは彼の体を放さず、カジエットの群れが再びレーザーのチャージを始める。

「ぐつ……がはっ！！」

『デューゴさんっ、デューゴさんっ!!』

「だ、大丈夫です…貴女だけは、絶対に傷付けさせは、しない…。
クラ…リオン、機動六課の座標を…特定、転移…準備。」

『了解。転移座標を機動六課執務室に固定。』

『……や。』

レーザーの嵐が再び掃射される。ガジェットの数は更に増え、先程とは比較にならない程の光の軌跡がデューゴへと殺到する!

『……いや。』

ヴィヴィオが両腕を前に出す。まるでデューゴの眼前で彼を守るように、モニターに映るレーザーの嵐へと腕をかざす。

そっ、まるで彼を”守るように”…。

『マスターヴィヴィオからの魔力のラインを増設、総合出力143%にアップ。』

「何っ!？」

『いやあああああっ!!!』

ヴィヴィオの絶叫と同時、デューゴに殺到したレーザーが全て”何か”に阻まれた。その現象に、その場にいた全てのガジェットが一齐にレーザーを発射するも、全てがデューゴに着弾する前に阻まれる。

それはまるで虹の羽衣。プリズムのように虹色の輝きを放ちながら、全ての攻撃を遮断する虹の羽衣が、デューゴの周囲を包むようになびいていた。

「これ、は……！？」

『守るんだ……。』

幼く、守られるだけだった小さな彼女は、決意の炎をそのオッドアイに宿し、眼前の敵を睨んだ。

『ヴィヴィオが……デューゴさんを守るんだああっ！！』

決意の叫びを上げ、彼女はいま守護の鎧を再び纏った！

守護、姫を守る"、鎧、騎士を護る"、鎧、

いかがでしたでしょうか。ヴィヴィオの能力発動の回でした。これに関しては原作とは形状が違いますが、これに関してはおいおい説明いたします。

では、次回の更新をお待ちください。

羽衣「決意」を秘めた虹色の輝き（前書き）

短かくなってしまう…。

ただ、ノートにまとめてみたらこれくらいになってしまいました。

羽衣「決意」を秘めた虹色の輝き

デューゴの身体に内臓されたフェイク・リンカーコア擬似魔力精製炉には、ある機能が備わっている。それは、マスターとなった人間の負担を軽減する為に、クラリオンチャームの許可無しにマスターとの魔力供給ラインを接続する事ができないというものだ。

クラリオンの思考パターンは、常に戦闘時の状況とマスターの状態を総合的に考慮した上で判断を下すよう設定されている為、通常マスターの独断によってラインを形成する事はできない。

にもかかわらず、いまデューゴの身体にはヴィヴィオから流れ込む魔力が溢れている。そして、その魔力によって形成された防御フィールドは、まるで羽衣のように彼の全身を包み込むように展開されていた。

「クラリオン、どういう事だっ!? 何故マスターヴィヴィオとのラインが…!」

『回答不能。ラインの形成許可は出していない。』

「なんだと!?!」

『マスターヴィヴィオの魔力ラインは、マスター本人の意思によって直接的フェイクリンカーコアに干渉した結果と推測される。現在フェイクリンカーコアは正常に稼働中。魔力量の一定数値突破により、“アンプリティアー”の使用を許可。』

「くっ…マスターヴィヴィオ、これはっ…!!」

その時、デューゴの言葉を遮るかのように、先程とは比べものにならない程のレーザーの嵐がデューゴ目掛けて掃射された。だが、その全てがデューゴの身体に着弾する前に虹色の羽衣によって阻まれる。それを見たガジェット達は、今度はケーブルによる直接攻撃に出ようとするが、またしても羽衣によってはじかれる。

デューゴは、己を拘束していたケーブルを力任せに引きちぎると、キャノンを連射しつつガジェット達と距離を取った。ガジェットの群れは警戒しているのか、先程より更に数をふやし周囲を取り囲むと、ケーブルを触手のように蠢かせながら様子を伺いだした。

「くっ…ううっ…。」

「マスターヴィヴィオ!？」

「だ、大丈夫…大丈夫だから。」

「このフィールドの維持には負荷が掛かりすぎています！早くラインを切ってください！ 私なら大丈夫ですから…。」

「ダメだよっ!!」

「なっ…何故です、このままでは貴女の身体にまで影響が…！」

『それでも、ダメ…。』

直後、デューゴの身体に異変が起きた。ヴィヴィオのラインを通じ、魔力以外の“何か”が流れ込んでくる。温かく、それでいて身体の奥が熱くなっていくような感覚。システムのオーバーヒートとは違う、遠い昔に失われた熱が蘇ってくるような感覚が、デューゴの全身を駆け巡る。

この熱いものがなんなのか、デューゴには理解ができなかった。しかし、いまユニゾンによって自身と一体となっている筈のヴィヴィオの表情が、拳動が、思いの全てが、まるで自分の事のように理解できる。

理解できない筈なのに、理解できる。混乱するデューゴの頭に、ヴィヴィオの声が響く。

『守られるだけじゃ、ダメなんだよ。』

彼女は、笑顔だった。戦いの恐怖に全身が震え、涙でグシャグシャ

に濡れた瞳を揺らしながらも…

それでも彼女は、笑っていた。

『一緒にいい。一緒にやりたい…！』

デューゴの両腕がゆっくりと左右に開かれる。それは、彼自身が判断して行った行動ではなかった。

無意識、そう無意識に。機械の身体を持つ彼が、“気が付くと？その態勢を取っていた。次いで胸部の装甲が開き、虹色の光を放つ十字架を象った部位から、虹色に輝くエネルギーのラインが両腕へと何本も伸びていく。

『デューゴさんとクラリオンだけじゃない。私も一緒に、やらなきゃダメなんだ…！』

ガジェットの群れから無数のケーブルが伸び、無防備な彼を再び拘

束しようとする。しかし、彼の纏う羽衣がそれを許さない。ケーブ
ルは全て弾かれ、デューゴの身体は微動だにしない。

すると、ガジェット達は一齐にレーザーの砲門を開き、今度こそ彼
を仕留める為に最大級の威力をもって掃射する。

四方八方から放たれたレーザーが炸裂し、巻き起こった爆煙でデ
ューゴの姿は全く見えなくなってしまった。

その爆発を聞きつけ、それまでガジェットの掃討を終えてデューゴ
の元へと向かっていた面々はスピードを上げた。そう、機動六課の
面々だ。先程、急にガジェット達がある一点に群がり始めた事で、
破壊活動が続いていた側の数は極端に減り、予想より早く食い止め
る事ができた。あとは数が集中しているガジェットの群れを倒すの
みという時に、先程の爆発が響いたのだ。

眼前に広がる爆煙を見た者達が、口々にデューゴとヴィヴィオの名
前を叫びながら、彼等の無事を早急に確認する為にガジェットの群
れの中へと突入しようとする。

「『アアアアアアアアアッ！』」

停止。ガジェットと機動六課が動きを止めたのは同時だった。そこ
にいた全ての者が、突如咆哮が響いた爆煙の中心へと目を向ける。

上空に吹く風により晴れた煙の中から姿を現した者。それは、両腕

を目一杯に広げ、その腕の先に虹色の輝きを携えた、緑色の鎧騎士の姿であった！

「虹に輝く剣にて、我らの敵を打ち払う！」

『いつけええっ！！』

「『アンプリイツ、ティアアアアアッ！！』」？

放たれたのは、無数の敵へと伸びていく無数の虹色の刃。100体はいるであろうガジェット全ての身体を刃が貫き、次いでその刃を通じ虹色の斬撃が全てのガジェットの身体を両断する！

「『ブレイクッ！』」

爆発、爆発、爆発！！

その身を断たれたガジェットが一斉に炎をあげて爆散していく。それにより起きた爆風に、機動六課の面々は思わず目を閉じてしまう。やがて爆風が収まり、ゆっくりと目を開いた彼女達の眼前に存在していたのは、威風堂々とその場に佇むデューゴの姿だけであった。

「ミッション、コンプリート。」

『私たちの勝ち、だね。』

それは、彼“ら”が初めて勝ち得た勝利。誇らしげなその姿が、それを物語っていた。

- - - - -

「ほつ、あの数を退けたか。」

暗闇に覆われた場所に、モニターの明かりのみが光を放っている。様々な機械が駆動音を鳴らすその室内で、男はモニターに映るデューゴの姿を見つめながらそう呟いた。

その呟きの直後、部屋の扉が開き一人の女性が入室してくる。

「やっぱりダメダメねえ、ガジェット如きじゃ役不足すぎて話にならないわ。」

「リシャルか。」

「遠隔操作をあんな馬鹿に任せちゃった私にも落ち度はあるけれど、所詮はガジェットね。数を揃えたところで雑魚には変わりないわ。」

「仕方あるまい。早急に次の手を打つ必要があるか…例の“新型”はどうなっている？」

「84%つてとこかしらね。ただ、より完璧にするにはもう少しかかりそう。なにより、まだ”相手”が見つかってない訳だし。」

「その事は任せてくれ。それに、アレが完成するまでは、しばらくこの“遺作”の調査を

進める事にしよう。リシャル、君はアレの完成に尽力してくれ。」

「了解、プロフェッサー professor。」

「“器”の力の発現、それに奴の遺作まで現れた……ついに、ついに我々は運命の時を迎えるのだ。そう、全ては……！」

- - この世界の戒めを解く為に - -

羽衣「決意」を秘めた虹色の輝き（後書き）

ご感想、お待ちしております。

記録ゝ脅威は消えず、“去った”のみゝ

「凄まじい力だな…。」

既に冷めてしまったコーヒーで唇を湿らせてから、クロノはそうポツリともらした。

市街地監視用のカメラと、局の戦時記録班から持ち込まれた映像データを見た感想がそれだった。クロノの眼前のモニターに映されているのは、戦闘時のデューゴの姿だ。ガジェットとの戦闘で見せた能力の高さもさることながら、それでも目を引いてしまうのはあの虹色の魔法だ。

彼に対するガジェットの攻撃を全て無効化している虹色のバリアと、一度に100体ものガジェットを破壊したアンプリティアーと呼ばれた攻撃魔法だ。高濃度のAMF展開時でもあの効果の高さ。クロノは改めて“デバイスヒューマン”という存在に戦慄していた。

加えて彼の体から放たれていたあの虹色の魔力光。あれは間違いなくヴィヴィオの…聖王の持つ魔力の輝きだ。他に類を見ない程の性能を持つサイボーグに、かの聖王の力を兼ね備えた少女のコンビ。さすがにそれをこうやって見せつけられては、警戒しないほうがおかしい。

「はやて、君の意見を聞きたい。」

「それは局員として？ それとも私個人の見解でエエの？」

「どちらもだ。」

モニターを見つめていたもう一人ははやては、腕組みをして少し考えるような素振りを見せた後、クロノへ向き直って口を開く。

「局員としてなら野放しにはできひん。ただ、個人的な見解としては…悪人には見えへん。もっとも、彼をそこまで知らんから安心はできんけどね。」

「僕とおなじ、か。」

「身体的なスペックやサイボーグになった経緯、それに製作者まで隠さなアカンとくると、キナ臭い事この上ないもん。おまけにあの性格やから、正面切って聞いても全く答えてもらえへんし…。」

「しかも、あの聖王の魔力を運用できるフェイク・リンカーコアというシステム。管理局のどのデータベースを調べても前例が無い。そうになると、やはり違法研究者の手によるものと考えるのがスジか。」

「ほんでもって一番の謎は……。」

「ロストロギアの情報だな。」

あの戦闘が起きる前、デューゴは確かに「黒の器に関するデータがある」と言った。もし彼を改造したのが器を追っていた違法研究者集団であるならば、彼は管理局にとってかなり危険な存在である。

しかし、彼には二度も戦闘で局の味方として戦ってくれた恩がある。たとえそれが本人の意思とは違うとしても、その事実は変わらない。その恩人を無闇やたらに調べる訳にもいかない。なにより、本人が頑なに解答を拒否している為、現状待つ以外に手がない。

それに、強制的な捜査を行なおうとすれば、マスターであるヴィヴィオが黙ってはいない。最悪、彼とのユニゾンを強行して取り返しのつかない事態になってしまう可能性もある。今日の戦闘終了後、デューゴとのユニゾンを解いた彼女は、そこに集結した六課の面々の前に立ち、まるで彼を守るように両手を広げて立ちはだかった。その場にいた全員は、手を出そうものなら噛み付かれそうなの必死の形相に少なからずショックを受けた。さらに……

『彼は、私の家に連れていきます。』

突然前にでたのはがこう言い出したのだ。当然ながら全員が反対、

フェイトなどは黙ったままのデューゴを睨みつける始末。（エネルギーの枯渇で動作を制限していただけだが…。）

この状況をラチが明かないと判断したクロノは、自分とはやてへの連絡先無しにヴィヴィオとのユニゾンを禁止するという条件を提示した。デューゴはこれにはさすがに反発したが、非常時を除いてという条件付きで了承し、事態は一応の終息を見せた。

条件を明記した書類を作成中に、フェイトはずつとなのはに彼の危険性を説いていたが、こういう時のエース・オブ・エースはテコでも譲らない。長年の付き合いからそれを理解しているはやてが仲裁に入り、なんとかその場を収めたのだった。

「すまないな、はやて。妹が迷惑をかけてしまった…。」

「あゝ、気にせんでエエって。あんな誰だってビックリするし、フェイトちゃんやってなのはちゃんやヴィヴィオの事考えてあんな風に一生懸命になってもうたんやから。それに、あそこでフェイトちゃんがもし何も言わんでも、多分シグナムあたりが食ってかかってたと思うし。」

「だろうな。僕としても今の状況で彼を局の外へ出す事には反対だし…。」

「ヴィヴィオのあの顔みてもうたら、なにも言えへんよ…。」

愛娘のように思ってきた少女の、あの強い意思のこもった表情。あんな表示を見せられてしまつては強引な事はできない。シグナムもそれが分かつたから、あの場での発言を控えたのだらう。フェイトがそれでも我慢できなかったのは、違法研究者への複雑な想いがあつたからだらう。自己を抑えられないというのは執務官として良い事とは言えないが、彼女の抱える思いも理解している。だから、あの態度や言動を責める事はできなかった。

「一応、彼の六課入りの手筈は整えておく。ただ、それは本人が了解した場合のみだ。拒否された時は、多少強引な手も考えなければならぬ。」

「やろつなあ…。まっ、なのはちゃんに任せるしかないわ。」

「「はあ…。」」

事態はまた始まつたばかり。今日何度目かになる溜め息をつき、
2
人は頭を抱えてしまふのだった。

- - - - -

「だから、その話はもう終わったでしょ？ クロノ君からも許可は出てるし、デューゴ君との約束だってしっかり決めたんだし。」

『でっ、でも…彼が今回の事件の重要参考人である事には変わらないんだよ！？ やっぱり、今日は私もっ…！』

「ダーメ。今日はヴィヴィオも私も疲れてるし、デューゴ君だってあんなに激しい戦闘の後なんだよ？ フェイトちゃんだって同じなんだから、今日はしっかり休まないと。」

『なのはっ！』

「じゃ、また明日ねフェイトちゃん。」

通信を切り、なのははハンドルを握り直して少しか車のスピードを上げた。先程までずっとフェイトと通信で話していたが、自分もフェイトも少し頭を冷やした方がいいと判断し、強制的に話を打ち切ったのだった。そうしなければ、したくもない喧嘩までしてしまうそうだった。

なのははフウ…と一息を吐くと、車内のミラーに映る愛娘と青年に視線を向けた。

「ヴィヴィオ、フェイトママとのお話終わったよ？　だから、いい加減機嫌直してくれないかな？」

「う〜〜〜！」

「…デューゴ君。」

「了解。マスターヴィヴィオ、頭をこちらに。」

「んっ…。」

デューゴに声をかけられ、ヴィヴィオはデューゴの傍へと頭を寄せる。それを確認すると、デューゴはゆっくりとヴィヴィオの頭の上に手を乗せ、髪を梳くようにして撫で始めた。ヴィヴィオは気持ち良さそうに目を細めていき、それまでギュッとデューゴの服を握っていた手から力を抜き、まだ膨れっ面のままではあるが身体をさらにデューゴの方へと寄せた。

先程彼に提案した方法はやはり効果覲面らしい。ミラーに映る光景に微笑みを零しながら、なのはは視線を助手席へと向けた。助手席には、銀色の小さなアタッシュケースに入ったクラリオンチャームが、陽光を反射して光を放っていた。

これもクロノからの指示。勝手なユニゾンを防止する為、ヴィヴィオの手元からクラリオンを離しておく必要があったからだ。デューゴからの説明によれば、ユニゾンにはクラリオンチャームの認証と

補助が必要との事だったのでこのような措置が取られたのだった。

「クラリオンもゴメンね、そんな所に閉じ込めたりしちゃって。」

『問題なし。ミス高町、貴女の自宅へ出向した主目的の説明を求めます。』

「あれ、一応説明したと思っただけ……。」

『説明不十分。加えて、先程フェイト・Ｔ・ハラOWNとの通信の前に、別の人物との通信の形跡を確認済み。説明を求めます。』

（プライバシー的な問題は、無視……なんだろうなあ。）

なのはは一度苦笑を浮かべると、クラリオンに向けて質問の解答を口にした。

「えっと、会って欲しい人がいるんだ。デューゴ君とクラリオンにとっても、きっとプラスになると思うよ?。」

そう言っ
てなのは
はウィンク
する。クラ
リオンは
それ以上
なにも聞
かず、後
ろの席か
らは可愛
らしい寝
息が聞こ
えてきた。
デューゴ
は流れて
行く外の
景色をジ
ツと見つ
めながら
、ヴィヴィ
オの手を
そつと握
っていた。
夕暮れの
街の中、
車は一路
高町邸へ
の道を走
って行く
のだった。

記録く脅威は消えず、 “ 去った ” のみく（後書き）

感想などありましたら、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0082r/>

小さな聖王と騎士物語

2011年9月30日09時58分発行